

保育の一日 (2)

——存在世界としての保育——

1. 子どもと出会うところから保育ははじまる

Rは母親に話しかけるが、母親は、うるさいね、だまっていなさいと云ってとりあわない。母親はRの上の兄のことで相談にきて、相談の先生と話している。Rはますますはげしく母親に話しかける。私は丁度、そこに来あわせて、Rのわきに腰をおろした。しばらくして、Rは私の膝の上に、すっと腰をおろし、快く静かにしていた。私はRとつき合おうと思ひ、「庭にいつて遊ばない？」と云って手を出したらすぐに私の手をにぎって庭に出

津 守 真

た。
Rが私の膝の上に来たとき、私とRの間には、応じ合う気持があった。こういうところから次の保育がはじまってゆく。それは後になって述べることにする。

最初に子どもと出会う仕方はいろいろである。
はじめて幼稚園にきた子どもが、母親に押されるようにして薄暗い廊下に立って、保育室の中にはいれないでいる。それに気付いた私は、身を低くして室の内側にしゃがみ、手を廊下の方に出して、しばらく黙っている。間もなく子どもの動く気配が感じら

れ、掌に子どもの指先がふれる。子どもは、そろそろと靴の先を半分くらい室内にいられている。私は少しずつ室内に移動すると、子どもも次第に室内にはいつてくる。時間にすれば、二、三分のことであろうか。子どもが私に心を寄せてくるのがわかり、もう私は自分の勝手にそこから離れることはできない。腰をすえて子どもとやりとりをはじめめる。

はじめてのクラスにいったとき、私はこちらから子どもに話しかけたり、誘ったりしないことが多い。手もちぶさたで不安定なのは私の方であって、私の必要に子どもを巻きこんだら、子どもの姿が見えなくなるだろう。私はただ坐っていたり、あるいは、子どもがしているのと同じことをして、積木を並べたり、紙を切ったりしている。すると、子どもの方から近寄ってきてくれて、私が思っていなかった何かがはじまる。こうして子どもの世界を見せってもらうことは数限りなくある。^{註1}

家庭の子どもの場合、保育者である親が、一日の生活の最初に子どもと出会うのは、朝、子どもが目覚めた時であろう。子ども

は、目が覚めたとき、すでに動いている現実の世界の中に突然投げこまれる。小さな弟妹が先に起きていて、母親に抱かれているかもしれない。いつもは傍にねている父親もすでに起きていて、ひとり寝床に取り残された子どもは、出おくれたと思うかもしれない。台所で忙しくしている母親に訴える子どもの声に、私は仕事を中断して子どもの方に向く。「お父さんにごはん作ってくれらる？」というとき、「ほんとのごはん？」ときく。「おままごとのごはんがいいよ」というとまもなく子どもはせせとままごとのごはんをつくる。そして次第に自分のおそびに移ってゆく。おとなが、ひととき、やりかけの仕事から手を放して、ふり返って子どもと付き合うところから、子どもは自分の活動をはじめることができるようになる。^{註2}

幼稚園に登園してくる子どもも同様である。朝、迎えるときの子どもはすでに母親やきょうだいとの間で、通園の途中でさまざまな体験をしている。ある子どもは快い気分であり、ある子どもは不満である。迎える側の保育者にその内容はわからないが、一瞬、子どもの方に向き直って、静かに応答することができる。子どもの心は幼稚園の生活の方に向いてくる。

知恵おくれの子どものクラスで、自閉的な子どもは、自分の指

を動かして眺めたり、数字を書き並べたり、自分の活動に閉じこもって、人に関心がないように見えることも多い。それをやめさせようとするのでもなく、その世界に押し入ろうとするのでもなく、共に傍にいて同じようなことをしていると、子どもの方から近づいてくることをしばしば体験する。砂に指で数字をかいている子どもの傍で、私も一緒に長い時間数字をかいていた。急にその子は地面の砂をひとつまみ指でつまみ、私の髪の上ののせて「ポーン」と云う。私が頭をふって砂を落とすとケラケラ笑う。そんなことを何回もくり返す。これは私から二年間にわたってつきあうことになった子どもとの最初の出会いであった。

自閉的な子どもとつき合うとき、ときには子どもは保育者の常識の範囲をこえた仕方に向ってくる。しかし、自閉的になるほどまでに自分の中に大きな問題をかかえているとき、その世界に割ってはいるのは、おとなも普通以上に覚悟をきめなければならぬこともある。そうして、思いきってその子のすることにつき合うと、子どもは思いがけない世界をみせてくれる。そこから子どもと交われるようになることを、私は何度も体験している。^{注3}

子どもと出会って、互いに応じ合うことがなければ、どんなによく計画された活動も、子どもの頭の上を通りすぎて、子ども自身のものにならない。子どもと同じ物理的空間の中におり、子どもに話しかけているからと云って、子どもと出会っているとは云えない。出会うことができたときには、子どもの心と応じ合った実感がある。そのときには、おとなの側も、自分自身の変化をせまられている。そこに腰を落ち着けてつきあいきる覚悟、自分のやりかけのことを中断して子どもの方に向きをかえること、自分が予想していなかったことをも受けいれるように心をひろげることなどである。

おとなが子どもと出会うことがなければ保育にはならない。おとなは子どもの方に心を向け、ひとときを、子どもの動きに合わせなければ出会うことはできない。保育者と子どもが出会って、互いに応じ合う生活を作り上げてゆくところに保育がある。

2. 出会う他者としての子ども

保育において、子どもと出会うとき、相手の子どもは、おとなである私にとって、究めつくすことができない未知な世界をもつ

た、他者としての存在であることを、あらためて気がつかされる。保育者は子どもを理解しようとするけれども、どこまでいってもそれは子どもの一側面であって、子どもは究極的にはおとなの理解をこえた、他人が手をふれることを許されない、尊厳な人間存在である。これは、子どもと出会うことの根底にある、おとなと子どもとの存在の様式である。その認識にたえず立ち返らないと、保育は存在の根底を失うのであると思う。

保育において、子どもと出会うとき、現実の存在としての子どもは、どんなに幼くとも、ひとりの独自の人間としての自律性をもっている。第一に、子どもは自身の人格の中心をもつて生きていく。また、成長して変化する自らの世界の新たな中心をたえず探し求めている。どんなに幼くとも、保育者にとっては、子どもは誇りをもったひとりの人間である。子ども自身の世界が中心をもって統合されているときには、子どもには自信があり、堂々として見える。^{注4}しかし、現実の存在としての子どもは、発達の途上において必然的に、また、いろいろの事情のために時として極端に、自身の世界が混乱し、中心を見失うことがある。そのときは、保育者の並々ならぬ労苦によって中心は回復されるが、それは、子どもは人格の中心をもった自律的存在であるという、保育

者の認識に支えられて可能になる。

第二に、私が出会う現実の子どもは、自分から発動し、自分で選択し、自分で行為する。子どもがほんのわずかでも手を動かかし、足を踏み出すとき、保育者はそれを、子ども自身の行為として尊重して応答する。子どもが自ら何かをしはじめるとき、それがごく小さなことであっても、自らの選択においてはじめてた行為であることにおいて、そこに子どもの世界があるのであって、私はその動きの世界と出会う。しかし、現実の子どもは、いろいろな事情のために、自分で選択して動くことが困難なことがある。そのとき、子ども自身のごく小さな動きに目をとめて、こちらも落着いて応じることができると、そこにささやかな出会いの時が生れる。

第三に、現実の子どもは、分割して考えることのできない人格アイデンティティとしての個人である。英語で云えば、individualであって、*irreducible*（分割することのできない存在である。私が出会うのは、子ども自身から切り離された活動——読む、かぞえる、つく、運動するなど——ではなく、自身の内的目標をもち、希望や悩みをもったその子どもである。現実には、おとなは、活動だけを見て、それをしている子どもに出会えないことがしばしばある。保育者は、限られた具体的なことを通して、その子ども

の独自の世界と出会う。

保育において、子どもと出会うとき、究極的には未知な世界をもった他者である子どもの前にあつて、私は畏れを感じる。そのとき、子どもと私との間には、こえることのできない淵があり、子どもと私とは距離をへだてた存在である。その子どもと、目があい、心が応じあい、笑いあい、親しいひと時を過したとき、そのことを通してその子の未知な世界にふれることができる。その瞬間には、他者である子どもの世界は私の世界とひとつになる。他者とひとつの世界をわかちあえるのは、保育のよろこびである。

出会うことにおいて、子どもと保育者とはひとつの世界に結合される。また、子どもはおとなにとって究極的には未知なる他者であることを認識するとき、すでにおとなは子どもと出会っている。未知な他者の認識がなければ、出会うことによる人と人との結合もないであろう。

保育から、未知な世界をもつ他者に対する畏れが失われると、人と人がなれあい、おとなが子どものすべてを思いのままに支配する保育に墮してしまふ。現実の保育は、常にその危険にさらされている。

3. 「出会う」ことの語義から考える

日本語の「出会う」という語は、ドイツ語の “begegnen”、英語の “encounter” にあたる。これらの語は、ほとんど同じことを指していると思われるが、それぞれの言語により、語の成り立ちが異なる。

ドイツ語の *begegnen* は、*gegen* という前置詞（対になって向い合う）に、*be-* がついて他動詞となった語である。つまり、人と人が向い合つて出会うことを意味している。英語の *encounter* は、ラテン語の *contra* という前置詞（—に對抗して、*against*）に、*eu-* がついて動詞となった語である。これも、人と人が互いに立ち向つて出会うことを意味している。印欧語系の語でこれに相当する語は他にもあるが、いずれも、顔と顔を向い合わせるという意味の語から成り立っている。

日本語の「出会う」における「会う」は、「物と物とが一つに重なる、物と物とがつり合う、顔が合う、顔を互いに向い合わせる、二つ以上のものが同じ動作をする」（日本国語大辞典）等があげられる。日本語でも、印欧語と同様に、顔を互いに向い合わせるという対向の意味があるが、それに加えて、「—し合う」

というように、二つ以上のものが調和をもって同じ動作をする意味がある。このことはさらに、「合ふ」に接尾語がついた「あはひ」(間)という語が、「太郎と次郎のあはひがよくない」とか、「工場で機械のアワエが悪い」というように用いられる地方があることからわかるように、二つの物や人の間がうまくかみあつて動くようにする意味があるという。

これらの語の成り立ちからわかるように、「出会う」という語には、人と人が対面して向いあうという意味と、その間が調和をもって動くようにするという意味があつて、西欧の言語では前者が強調され、日本語では後者が強調されているように思われる。保育において子どもと出会うというとき、その語から、この両者の意味が連想されると云つてよいであらう。

さらに面白いことは、日本語では「出」という接頭語が、英語では *out* 「入」という接頭語が、ドイツ語では *aus* という他動詞を作る接頭語がついていることである。他人と会うのに、日本人は自分の殻の中から「出」てゆくことを強調しなければならない心理があるのかもしれない。また、英語国民は他人と向き合った関係に入るのに努力せねばならないのかもしれないし、ドイツ人は他者である人と対等の立場で向い合うことを殊更に意識するのかもしれない。似通った現象をあらわすのに、言語によって、この

ように語の成り立ちが違ふのは、単に国民性の相違を示すというだけではなく、この現象の中に、これらの諸要素が共通に含まれていることを示唆するものではないだろうか。

保育において子どもと出会うのに、私共はしばしば自分の中に閉じこもりたい気持を被つて外に出てゆくことにつとめる。保育には、自分のことをかまわつていられない外向的な性格がある。また、子どもと応じ合う関係に入るには、そのチャンスを逃さないことが必要である。そして、子どもと向い合ったとき、私共は、未知な世界をもつた幼い存在と、畏敬の念をもつて見る。

母親にはげしく話しかけるRのわきに腰をおろしたとき、私は土曜の午後の半日をRと共に過す覚悟をしていた。そして、Rが私の膝の上ですつと腰をおろし、しばらくを快く静かにしていた、その小さな瞬間がなければ、このあと面白く展開したこの日の保育はなかったと思う。

具体的には取り上げるに足りないような小さな場面では、私共は子どもと出会う。

(つづく)

注1 私の原著「保育の体験と思索——子どもの世界の探究」

は、このような出会いからはじまる。

注2 同書の中の家庭の子どもの保育の諸例は、朝の生活から記すならば、こういうところからはじまる一日の部分である。

注3 同書の中の知恵おくれの子どもの諸例では、最初は交わりきっかけを見出せないこともしばしばあった。しかし、時間をかけるうちに、出会う瞬間をもつことができるようになる。とくに同書の第10章、第21章、第33章などの子どもは、このようにして交わるようになった中での活動である。

注4 同書第36章に、幼児期に十分に生活することができたことから生れる自信のある姿を記した。能力はあっても、自分の世界の中心を獲得していない子どもが多くある。幼児期の遊びの重要性は、このことから知られる。

注5 柳田国男「毎日の言葉」創元社、昭21 この中で、「アハとは本来合ふ・逢ふなどという動詞からこしらへた、上品な古語でありました。」と述べてある。

